

宗像市 (福岡県)

素材研究
(国内)



総社・辺津宮境内にある宝物館には貴重な神宝や文化財が収蔵・展示されています



沖津宮遥拝所からは約50キロ先の「神宮」沖ノ島を遠望できます



2017年に世界文化遺産登録目指す「宗像大社」
日本の草創期から続く伝統が重要な観光資源に



交通安全の神社としても知られる「宗像大社」の総社・辺津宮には、年間180万人の参者が訪れます



毎年10月1日に行われる「みあれ祭」。数百艘の大船団が大島から神湊へ向かいます



玄界灘でとれた新鮮な魚介などが並ぶ「道の駅むなかた」。レストランも併設されています



沖ノ島を望む沖津宮遥拝所(大島)

宗像観光協会に加盟する旅館や飲食店で提供されている「玄海天然印・大漁膳」

福岡市の北東に位置し玄界灘に面した宗像市は、同市の象徴ともいえる「宗像大社」とその神領とされる離島「沖ノ島」などが、2017年の世界文化遺産登録に向けて国内推薦されたことで、注目が高まっています。

出土した神宝8万点は全て国宝

宗像大社は、皇室の祖先神とされる天照大神とその御子神である三姉妹の女神(宗像三女神)を祀る神社で、全国で6400社を数える宗像神を祀る神社の総本宮です。

朝鮮半島へ通じる海の道「海北道中」にある二つの島と九州本土の三宮を総称して「宗像大社」と呼ばれています。

三女神の長女神である田心姫神(たごりひめのかみ)を祀る沖津宮が鎮まっているのが沖ノ島で、日本の草創期にヤマト王権による国家的な祭祀が行われており、23カ所の祭祀跡から出土した神宝は8万点を数えます。その全てが国宝に指定され、沖ノ島は「海の正倉院」という異名を持つほどです。

古くからの入島制限が守られてきた沖ノ島は、島全体が信仰の対象であり、1500年以上にわたってほぼ手つかずのまま伝統が継承されてきました。現在も、末女神の市杵島姫神(いちきしまひめのかみ)を祀る総社・辺津宮から神職がただ一人で奉仕し、女人禁

制や海中での禊などの掟が守られる「神秘の島」として知られています。

行くことのできない 神秘の島を感じる旅づくりも

宗像市経営企画課世界遺産登録推進室の徳永淳室長は、「行くことのできない沖ノ島の最寄りとなるのが大島で、昔から沖ノ島を守ってきた地元の人々などを通じて、沖ノ島を感じていただきたい」と説明。「島全体が信仰の対象で、興味本位で近づけない」特殊性への理解を求めています。

湊津姫神(たぎつひめのかみ)を祀る中津宮がある大島は、九州本土から10キロに位置し、約60キロの沖合にある沖ノ島に最も近く、北岸の沖津宮遥拝所から沖ノ島も望めます。島そのものが御神体で、厳格な禁忌により通常渡島の許されない沖ノ島は、遥拝が古来からの信仰の形となってきました。

2009年に国内の世界遺産暫定一覧表に記載された「宗像・沖ノ島と関連遺産群」は、「神が降臨する洋上の島に対する遙拝・信仰の在り方を現在にも良好に伝える資産」と説明されており、その意義をないがしろにするツアーや旅行商品は文化遺産としての価値を損ねるものとなります。

世界遺産登録を目指す「宗像大社」をどう商品化するか、旅行会社の腕の見せ所であると同時に、既存の世界遺産ツアーもどれだけ本質に迫っているのか、見直しを求められることにもなりそうです。